



コバトン

病虫害防除情報



令和5年5月 日
埼玉県病虫害防除所

1 情報名 稲（早期栽培）のニカメイガ（ニカメイチュウ）について

2 情報内容

(1) 稲のニカメイガ（ニカメイチュウ）

ニカメイガは1960年代まではヒメトビウンカと並ぶイネの重要な病虫害でしたが、徐々に発生量が減り、本県では40年以上大きな被害は発生していません。

県内の予察灯等への誘殺も周期的な増減はあるものの、全体的には減少傾向でしたが、ここ数年は増加傾向にあり、早期栽培地域を中心に被害が散見されるようになっていています。本年は、予察灯への誘殺が平年より早く、誘殺数もやや多くなっています。



ニカメイガ中齢幼虫(体長約10 mm)



ニカメイガ成虫(体長約13 mm)

(2) 被害の様子

本虫が加害するのは幼虫期のみです。第一世代幼虫は初期被害として、株元の葉鞘の変色（褐変）症状が起きます。この初期の葉鞘の変色は1株あるいは数株に集中して発生することが多く、褐変した部分から葉が折れ、水に流れたようになる流れ葉症状が見られます。その後、幼虫が茎の内部に食入することで被害が進み、心枯れ症状となって現れます。さらに、第二世代の幼虫は稲の出穂後に食害することで白変穂として現れ、被害株は不稔となります。

参照：「農業総覧 病虫害診断防除編」 農山漁村文化協会（1997）



第一世代幼虫による稲の葉鞘の褐変



ニカメイガ幼虫による葉鞘変色茎



第一世代幼虫による稲の心枯れ症状



第二世代幼虫による白変穂(写真中央)

(3) フェロモントラップ発生調査結果

当所で実施している水稻ほ場の病害虫発生状況調査では、令和2年まではほとんど本虫の被害が見られませんでした。令和3年から早期栽培地域の水稲ほ場を中心に、心枯れ症状・白変穂などの被害が確認されるようになっていきます。

このため、本年からフェロモントラップによる本虫の発生量調査を14年ぶりに再開したところ、幸手市神扇で5月16日までの越冬世代成虫誘殺数が416頭、加須市麦倉で5月21日までの誘殺数が165頭と、早期栽培地域での誘殺数が多くなっています。いずれも調査地点も5月の第1半旬が越冬世代成虫の発生ピークとなっており、越冬世代成虫の誘殺は6月第1半旬ころまで続くと見込まれます。

ニカメイガの要防除水準は、越冬世代成虫の1トラップ当たり誘殺数が400～500頭となっていますので、早期栽培地域では防除しないと被害が発生する懸念があります。

(4) 防除対策

本虫の防除は、箱施薬が最も省力かつ効果的です。早期栽培地域で本虫を対象とする箱施薬を実施していない場合は、速やかに薬剤防除を行いましょう。若齢幼虫

のうちの薬剤防除が有効ですが、粒剤は効きははじめが遅いため、早めの散布を行い、散布後1週間は止水してください。

また、窒素多肥は本虫の成長を促進する要因となるため、適切な施肥を心がけてください。

表 ニカメイガ（ニカメイチュウ）の防除薬剤例（本田防除用薬剤）

薬 剤 名	IRAC コード※	使用時期	使用回数
トレボン粒剤	3A	収穫 21 日前まで	3 回以内
パダン 1 キロ H 粒剤	14	収穫 30 日前まで	6 回以内
スタークル 1 キロ H 粒剤	4A	収穫 7 日前まで	3 回以内
チューンアップ顆粒水和剤	11A	収穫前日まで	3 回以内
ディアナ SC	5	収穫 7 日前まで	2 回以内

（使用基準は令和 5 年 5 月 26 日現在）

※ IRAC コード及び FRAC コードについて

病害虫の薬剤抵抗性発現防止の観点から、IRAC（世界農薬工業連盟殺虫剤抵抗性対策委員会）及び FRAC（同連盟殺菌剤耐性菌対策委員会）の農薬有効成分作用機構分類コードを記載しています。

農薬工業会ホームページ <http://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>

<農薬使用上の注意事項>

- 1 農薬は、必ず最新のデータ及びラベル等を確認の上、使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。

※ 埼玉県農薬危害防止運動実施中（令和 5 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）

問い合わせ先 埼玉県病害虫防除所 TEL：048-539-0661